

元來体操というものは、運動神経の発達したものが得意なものです。なかでも器械を用いる体操例えば鉄棒・平行棒・吊環等になると相当な腕力、腹筋力更に勇氣と沈着冷静その上になお繊細な神経を必要としまして、運動のうちでも困難な部に属するのであります。従つて、体操クラブの部員の性格は、概してもの静かで真面目で、然も意志の強固な人が多かったように記憶しています。この筆をとるにあたり、そうしたかつての部員の方々がいまだうに記憶していられるか皆目その消息のわからないのを甚だ遺憾に思う次第であります。名古屋に住む關係で、八高創立五十周年記念事業実施について体操クラブの幹事のご指名を受けましたので、拙き文を送りその責を果します。

山岳部の思い出

内 藤 仁

僕が八高へ入ったのは、昭和二十二年だったから、丁度四十回目の最後の卒業生である。戦後の混乱した世相の中に、八高の最後の卒業生となったことが、今から考えると何か偶然ではない様な気がして、懐しく思い出される。三年間の歲月も、慌しく過ぎ去つてもう八年、当時の思い出も、いつとはなしに薄らいでしまった様な気持もする反面、まだつい昨日今日の事の様に、身近に感ずることもある。そうした色々な思い出の中でも、特に懐しく思い出されるのは、何といつても、山岳部での、あれこれの山の思い出である。

ほんのちよつとした事が機縁で、とびこんだ山岳部での経験や、先輩同輩諸兄のことなどを思い出すと、時々ほほえましい気持になることがある。

二十二年の初夏、校内の掲示板に、御在所岳登山の勧誘がのつたことがある。その時、ふらつと、どんな所か一度行ってみようと思ひ、ついで行ったのが事の始まりでいきなり、生れて始めての岩登りなる経験を味わされてしまった。確か土曜日の夕方ガタゴト電車にゆられながら、湯の山につき、水谷、日比氏と僕の三人で、北谷小屋へついたので、もうとつぷり日も暮れて、暗くなった頃である。小屋へついたら、ここにはもう、既に一人、大柄な山男然とした男が、焚火をしながら、「ヤー」と気さくに

迎えてくれたが、之がリーダーの武藤氏だった。その晩は、四人でとまったのだが、その時始めて、物好きにも誘はれてついで来たのは、自分一人だと気がついて、いささか心細くなつてしまつたが、三人共、とても陽気で、いかに楽しんで、打ちくつろいでいるのに、幾らか、安心感を覚え、ぐっすり眠りこんでしまつた。翌朝、早速前尾根登攀である。ザイルの両端を、水谷、日比氏が体に結び、僕を真中に、結んでくれて、まるで上と下とから、大切な荷物でも、引張り上げる様にして、つり上げてくれるのだが、切り立った岩角に立つと、足もすくみ、目先がかすんで、とてもたまたものではない。数十米も下の谷底を、のぞきこんでは、とんでもない所へ、ついで来たものだと、今更らながら後悔したが、追いつかない。目と鼻をつまむ様な気持で、やっと頂上近くの登山道へ出た時は、「ホー」と大きな溜息がでてきた。この時始めて、ザイルの結び方と、ジッヘルの仕方と、サムニー登攀というのを教わつた。それから、一ヶ月程して、殆んど忘れかけた頃、武藤氏から、穂高へ行かないかと、誘われた時、何という気もなしに、二つ返事で、承諾してしまつた。今から思うと、まるで、山岳部へ入る為、八高へ入つた様な気がする位、ずるずると、その引力に引きずられた様な、格好であつた。

二十二年の夏、それは僕にとって、最初の本格的な、夏山合宿である。その時のメンバーは、リーダー武藤氏、サブリーダー横井氏それに水谷・日比・稲垣・吉村氏と僕の七人。OBとして、伊藤・村山・清水・大津の各先輩四人といった顔ぶれだつた。この時始めて伊藤洋平さんという人に会つたが、当時八高の山岳部という、上高地界隈では、随分、顔がきいたらしく、石岡バックカスさんとか、伊藤洋平さんとかいった先輩は、土地の人もよく知つていた。出発は七月中頃だつた。武藤氏と稲垣氏と僕の三人は、後発隊として、一日後れて出発した。松本から馬々駅へついたら、夜が白々と明けかけていた。武藤氏が「金庄屋の親父の所へ寄つて行こう」というので寄つてみたら、漬物の甘いのを、お茶と一緒に出してくれたが、何ともいえない、うまい味だつた。然し金庄屋というのが、どういう關係の人か、はつきりわからなかつたので、何故あんなに、親しそうにもてなしてくれたのか、よく判らない。

それから、そこを出て、徳本越えをしたのだが、その道程の長いこと、上り道の苦しかったこと、岩魚止めのあたりで、三人共グロッキーになつて、へばりこんでしまつたこと、途中で一緒になつた、藤森さんという土地の人が、茶路らしいノドで、ヨードルをきかせてくれたことなどが、いまだに記憶にのこつていて、懐かしむ。

四―五貫程度だったと思うが、峠を越した頃から、もう日も暮れかけて、上高地小梨平のテントへついたのは、九時頃だったかと思う。一晚、始めてのテントで、シュラフにもぐって寝たが、翌朝眼を覚ますと、体も暇もなく、穂高湖沢へ向って出発である。その頃は、まだ上高地といっても、一般の登山客とか、行楽客など、殆んどなく、時々、どこかの山岳部員が、テラホラしている程度で、実に静かな処だった。水と空気が、実にすがすがしく、徳沢湖辺りの草花が、とても美しかった。

横尾の出合の近くで、梓川を渡ったが、腰迄清流につかりながら、三人がしっぺりザイルでしっぺり合ひ、水流に押し流されまいとして、水の冷たさと、精神の緊張に、歯をくいしばって、梓川の急流を横切ったことが、実にはほえましいものと思ひ出される。たしかもっと上流迄行けば、橋があった筈なのに、何故、下半身ずぶ濡れになって川を渡ったのか、武藤氏にもきいてみないので、わからないが、とにかく、随分無茶なことだったと思う。そうこうして、河原を歩いて行く中に、今度は稲垣氏が、ゴムの運動靴で歩いていて、足の裏が痛くなつて、歩けなくなつてしまった。先発隊が上高地へ残していった荷物もいれると、八―九貫のものを背負っていたし、ゴム靴ではとてもたまたまのものではない。それでも彼は、痛さをこらえて、薄暗くなる頃迄に、やっと湖沢の出合迄辿りついた時、先発隊が、迎えにきてくれた時は、本当にうれしかった。

始めて踏みしめた、雪溪の踏みごたえ、見仰ぐ、穂高連峯の偉容、驚嘆と緊張とでしばし、ボー然と立ちすくんでしまった。

湖沢小屋のすぐ下に、テントを張ったわが八高部隊は、露出した岩の上で、寝心地は、余りよくなかったが、水はけの便はよく、排泄場も、そここの岩と岩の間にまたがってすれば、雪溪からとけて流れてくる水に洗われて、またたく間に雲散霧消、その点では、至極便利だった。夜小用にテントを出ると、奥穂前穂の黒いシルエットが、頭の上に覆いかぶさってくる様な、圧迫感がひしひしと身に迫り、冷い夜気と、青黒く澄み透った夜空の感じが、丁度湖沢谷が、穂高の深い湖底であり、その湖底から、すき透った青い水を透して、一際まばゆい星空を、眺めている様な気がした。

一夜あければ、実にはすがすがしい朝である。早速、前穂のアタックに出かける。五峯のホルから、四峯・三峯・二峯、前穂の頂上へと出る。四峯とかで、往年の名アルピニストが遭難したとかで、随分重圧感のある岩場である。全く岩場では、ザイル一本が、命の綱である。帰途は、三峯のホルから、グリースードだ。実に快適だが、ピッ

ケル一本に、一命を託しての離れ業でもある。スリッパでもして、クレバスに落ち込んだら、それっきりとも限らないし、落石も、腹にずしんと響く様な音を立てて、落ちてくる。湖沢の谷底迄、一気にすべり下りて、始めてホッとす。かれこれ、五、六時間の労働である。

奥穂、ジャンダルム、湖沢槍、北穂、滝谷と、アタックの日程は忙しい。

雨の日もある。テントの中で、山男の息抜きである。ボーカーもやれば、クイズもやる。歌も歌えば、Y談もやる。先ずは屈託がない。まして、ピリン氏は話の泉、スパーロー氏は歌とトンチ教室、歌右衛門はY談家ときたら、退屈のしようがない。然し又、雨の日は、炊事当番が大変である。ピニールや傘なんか持っていない。雨と競争で、それも切りたての生木に、火をたきつけるコツは、山男ならでは、とても真似ができない。御飯の八分炊き、九分炊きは、まだ上の部、その内、火でも消えようものなら、半煮え、半蒸し程度は、覚悟しなければならぬ。腹が空いている時は、それでもうまいし、又実によく喰う。ミソ汁には、天然フラビも入る。

雨の日も、アタックの日も、夜はよく寝る。第一、ローソク以外、アカリがない。それでも夕暮頃は、何となくロマンチックな、又多少センチメンタルな気分になる。そうした時、よく歌がでる。それも山の歌である。アツミ節という、抑揚と、余韻の長い歌である。

山にこがれて	徳本越えりや
雪の化粧で	待つ穂高
ザイルかついで	穂高の山へ
明日は男の	度胸だめし
イワナ釣る子に	山路を問えは
雲の彼方を	竿でさす
槍が亭主で	穂高が女房
仲でリン気の	焼ヶ岳
山の常さん	のんきな男
女房抱かずに	徳利抱く

かくして、一週間から十日の日程は、瞬く間に過ぎてしまった。

一本のザイルと、一本のピッケルとに、一命を託した山の生活は、此の世のものとは思われぬ程単純で、この上なく充実したものであり、又こよなく懐しいものであつ

た。

その頃、僕らと前後して、石岡さんの率いる、三重県神戸中学の生徒がきていた。

そして氏が、二人の生徒と一緒に、屏風岩の正面壁のアタックに出かけた所、体力つけて、頂上一步の所で、夜あかししてしたので、翌朝、伊藤さんがその救援にかけつけたことがあるが、その時は、屏風の正面を登るなんて、随分無茶なことをするものだと、思ったが、翌年、石岡さんにつれられて、屏風岩を、とにかく下から上迄登攀した時は、何ともいえない爽快感を味わった。実にすばらしいと思った。石岡さんという人は、身体は小柄だけれど、岩登りの名人だなあという気がした。屏風岩には、八高テラスとか、慶応ルンゼなどの名のついた所もあるが、正面壁の完全登攀に成功したのは、石岡さんあたりが、最初ではなかったかと思う。伊藤さんも、その時分から、山岳雑誌「岳人」の編集もしておられたし、山のエキスパートとして、山岳部並に山稜会の重鎮だったし、たしか、武藤氏と一緒に屏風岩に登攀、屏風に關しての権威者だということも聞いて、何か一種尊敬の念を、僕ら新米連中は抱いていた。

淵沢合宿第一年は、僕の丁度八高一年で、始めての合宿経験だったが、秋冬は、三年生の受験期でもあり、長期合宿なく、定光寺、御在所北谷のアタック程度で終った。

翌年三月、大学入試も終り、最後の春山を、鹿島槍岳と決定、リーダー武藤、サブ横井日野と僕、OBとして村山、竹下両氏が参加、六名で鹿島槍へと出発した。春三月とはいえ、積雪量も相当あり、ワカンジキでも、膝迄雪にうもれながら、ベースキャンプを四合目あたりに設営、雪の上に、雑木の枝を積みあげて、その上にテントを張った。無論雪崩等の心配のない場所を選んだ。その年、二十三年三月は、比較的気温も温く、天候もよかった。二日目には、六合目辺りに雪洞を掘り、雪洞で一夜を明かした一行は、村山竹下、武藤日野の二班に分れて、頂上アタックに出かけた。横井氏と僕は、ポーター役をつとめた。天候にも恵まれ、登頂は成功、二班は月夜の明るさを利用して、夜十時か十一時頃、ベースキャンプ迄、一気に帰ってきた。僕らが作っておいた握り飯は、冷凍ミカンか何かの様に、ガリガリに凍ってしまったが、それでも、登頂の成功と無事を喜んで、夜の更けるのも知らず、その握り飯をポリポリ頬ばりながら、語り合っていた。僅か、小規模の表面雪崩程度で、大した雪崩にも出合はず、無事登頂できたのが、何よりの成功で、僕自身、雪崩の無気味さと、雪庇のすばらしさと、雪洞の冷え冷えた寝心地とは、又してもない経験だったと思う。然し雪の山は、夏山と違って、一種自然の脅威といったものを、感じさせられる。無気

味である。然し白一色の銀世界は、又この上もない、美しい景観である。かくして僕は、最初の一年で夏山春山の経験をする事ができた。

僕が二年になると、先輩は殆んど卒業して、現役は稲垣・日野と僕の三人だけになってしまったが、新学期が始まると同時に、加藤・牧・仙石・松原・星野・大橋が加わり、一べんに、にぎやかになった。殆んど新米ばかりだけれど、それでも皆、それぞれの登山経歴を持つ連中で、かなりシユタルクな奴の、寄り集りとなった。

淵沢合宿は、此の年も同じ様に行われた。OBとしては、武藤氏・横井氏だけだった。それに、石岡さんが、神戸中の連中をつれてきておられた。そして僕と松原が、その連中と一緒に屏風岩を登る機会を、与えられたわけだが、此の年に特別に参加された人が、もう一人居る。戦時中、スイスのベルンにおられた、加倉井教授が、我々と一緒に合宿に参加された。教授は、本場のアルプスを、相当歩かれた猛者で、岩登りも、グリセードも達者なもので、僕らの方がアツケにとられていた。僕なんか二年目には、前穂のリーダーとして、登攀したが、実際一回だけの経験で、ルートもよくわからないのに、よく登ったものだと思うと、今更ながら冷汗ものであるが、当時は無茶苦茶張り切っていた様にも思う。三、四日で、今度は北穂の頂上へテントを移し、滝谷をアタックするんだといって、稲垣・加藤・日野あたりが、出かけていったが、随分彼らも大胆だったと思う。僕はこわくて、とうとう滝谷へはついて行かなかった。滝谷はこわい所だと、きめていたのかも知れないし、根は気が小さかったからかも知れない。

かくして、一週間の合宿も終ったので、加倉井さんと星野と僕の三人で、槍ヶ岳から、燕ヶ岳への逆縦走を試みることにした。二人共、実にシユタルクである。教授はもう当時、四十位だったと思うのに、実に健脚で、おどろいた次第である。肩の小屋に一泊、槍の頂上の気分を味わった後、一気に燕ヶ岳迄とばし、その脚で中房温泉迄、下りてしまった、アルプス銀座といわれるだけに、稜線は、楽なコースである。二年目の夏山合宿も、かくして無事に終った。最初の年程の感銘はなかったが、一入山に對する親愛感が、どぎついものでなく、淡々と感じられる様になった。

その年の秋、現役四名、加藤・星野・大橋と僕で、木曾駒へ行つた。まだ新雪がふつた程度であったが、帰途紅葉の特に美しかったことが腦裡に残っている。この時期班として、日野と仙石とで、奥穂へ出掛けたが、その登山記が、たしか中日新聞の立平亮重の手を通じて、中日ウィークリーに載った。

僕らが三年になると、僕らの一年後輩から、新制大学へ切りかわってしまった。山居部も名大山居部となった。八高は僕らで最後だときいて、何か、尻から追いたてられる様な気がして、三年の時は、殆んどどこへも行かずに、終ってしまった。

然し、僕らの後輩は、名大山居部となっても、僕らの遺産をついで、今でも夏は、上高地にベースキャンプを張っている由である。

去年の夏頃だったと思うが、横井さんが常務である東餅で、八高山居部の先輩である、鳥居さんの南極観測隊の報告と、中尾さんのカラコルム学術探検報告の会が、同じく横井さんの骨折で開かれたので、僕も出席させてもらった。随分古い先輩も、来ておられた様であるが、僕らには一向面識もないので、ただお話を拝聴しただけであるが、これら先輩が、八高時代の経験を生かして、各分野に、第一線として活躍しておられるのが、何となく誇らしく感じましたし、一部、石岡さん、武藤さん、横井さんら先輩知じとしての面識も新にすることができたのは、大変うれしかったし、鳥居さんと伊藤さんとは、共に南極観測隊に参加されたが、伊藤さんが、氷原のタバコ屋を開店した話や、船に弱かった話等を、鳥居さんが、いかにも面白そうに、話しておられるのを聞いて、何となく、ひとりでにはほえましく感じたのも、僕自身、僕なりの偶像を各先輩に対して、持っていたからであろう。

弁論部史に代えて

—あの頃の淡き思い出—

渡 辺 龍 策

いつかは、まことに記録しておきたいと思いつながら、集めておいた資料の焼失と、わたくし自身の怠慢とで、早くも三十年の歳月が流れ去ってしまった。したがって、自分一人の、而も一時期の記憶のみに頼った、限られたこの記述は、全く自己中心の自虐的なものに墮してしまおうと思うけれども、この機会を利用していただいで、「過ぎにしものはみな美しき」思い出を綴る気儘を、予め御寛容願いたい。

たしか一昨年だったと思うが、わたくしは、老いの一敵といった恰好で、河村友夫君（三十九回卒）の労を煩わして、八高弁論部関係出身者の在京有志の会合を催した

ことがある。

会場の斡旋をして下さった川角道夫君（十五回卒）や、八高時代の弁論部委員兼庶務部長の富田一郎君（十六回卒）や、その日の幹事役の川村君をはじめとして、七、八人のほんの思いつきの小範圍の集りであったが、落着いた、心温まる懐かしい会合であった。

その席に、二年先輩の応援部長、おひげさん事、佐藤保雄氏の飛入りがあったことは、思い出草に一段と花を咲かせたのであった。——というのは、わたくしが八高三年のとき、すでに佐藤氏は卒業してはおられたが、二年の富田一郎君は、弁論部委員で、応援副部長をかねていた。それで、先輩の佐藤氏やこの富田君など応援関係者の肝入りで、弁論部と共同主催で、選手推戴式なるものを盛大に挙行したのであった。

これは、その年の各運動部選手を推戴し、そして激励する式典であった。八高創立以来、永きにわたって禁じられていた選手制度が、芝田校長の英断で、公然と認められたときであっただけに、この催しは、実に有意義なものであった。——こんなわけで、当夜の佐藤おひげさんの出席は、弁論部出身のわれわれには、感慨を更たにするものがあつたのだ。

例えば、大正末則は、学生弁論界の最盛期ともいふべきであつたらうか。関東・関西を問わず、そして、官公私立を問わず、各大学、高等専門学校弁論部は、お互いに弁士を派遣しあつては、弁論会（演説会）を開いていた。

更に、これを煽るが如く、講談社発行の雑誌「雄弁」では、演説原稿の入選者を決めたり、学生花形弁士を写真入りで、毎月紹介したりして、商魂のたくましいところをみせていた。中学時代から、すっかりこの空気に感染してはわたくしが、同様に胸をふくらまして、八高の門をくぐつたのはいうまでもない。

当時、八高弁論部の主なる委員は、三年が大岩氏、二年は所沢氏と故森本氏であつた。新人のわたくしは、生意気にもこれら先輩の尻をたたき、ハッパをかけたものだった。

その年の初夏、東京の日大と専修両大学で、相ついで開催された、全国高等専門学校弁論大会に、わたくしは許しを得て出席した。新入ははやの新調の制服では、気がかけるので、白地のカスリ和服に袴を短かくはき、手拭を腰にして、肩を怒らして